

あいらの歴史と物語

発行責任者 始良歴史ボランティア協会
会長 竹之下 洲一
編集者 広報部 恒吉 一洋

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498

始良市歴史民俗資料館 0995(65)1553

鍋倉製鉄所とおおたにためいけ

竹之下 洲一

幕末、帖佐鍋倉の別府川沿いに、薩摩藩営の鍋倉製鉄所がありました。藩主島津斉彬が推進した集成館事業に関連した施設の一つです。

製鉄所の創設された時期は明らかではありませんが、嘉永4年(1851)、斉彬の藩主就任以降と推測されます。嘉永6年12月、斉彬は大隅巡見の途中に製鉄所に立ち

寄り、鋼(ハガネ)生産技術の未熟さを痛感し、安政元年(1854)には伯耆国(鳥取県)などから技術者を招き、安政4年には加治木の刀工・池伝右衛門を大坂に派遣したりしています。

文久元年(1861)3月、鍋倉製鉄所では帰国した池伝右衛門の指導で、加治木弥勒の大谷に用水池を造ることを決め、文久2年1月から5月にかけて溜池づくりにあたりました。溜池からの水流で水車をまわし、その動力でそれまで足踏み方式であったフィゴを動かして火力を強くし、鋼を生産する技術が確立していきました。しかし、大谷溜池は水不足状態で、弥勒の木田用水から補給するなど、苦労があったようです。

鍋倉製鉄所の操業は長くは続かず、慶応3年



(1867)5月の別府川の大洪水で大部分が流失し、明治5年(1872)頃には閉鎖されたと伝えられています。

平成26年には“明治日本の産業革命遺産”として、約160年前の薩摩藩「旧集成館」の諸工場群と、動力源として水を供給した「関吉の疏水溝」、さらに「寺山炭窯跡」が世界文化遺産に登録されました。

鍋倉製鉄所と大谷溜池も、それらと並ぶ施設として集成館事業を支えていました。今後の調査で全容が明らかになることを期待しています。

*フィゴ＝製鉄所などで火力を強くするための送風装置

しまづぶんごのかみすえひさくようひ 島津豊後守季久供養碑

梅田 眞次

島津季久は島津家8代当主久豊の第三子で、9代当主忠国の弟です。豊後守を称したことから、豊州家の祖となります。

季久は、兄忠国の命により平山氏を攻め落とし瓜生野城（後の建昌城跡）を築きました。季久の二男忠康は平安城を守り、三男満久は加治木氏の養子に入り、加治木氏20代当主として加治木城を守りました。四男守興は出家して起宗和尚と名乗り、米山薬師を建立しました。

文明9年（1477）季久は病死しましたが、豊州家の菩提寺として自ら建立に着手した総禅寺が未完成であったため、雲門寺に葬られました。総禅寺完成後に季久の墓は改葬されました。

雲門寺墓地には、子孫の黒木島津家9代久邦によって供養碑が建てられました。現在供養碑は、雲門寺跡の仁王像から南西に約500m先の個人宅に移されています。地元では「豊後どんの墓」「黒木どんの墓」と呼ばれています。



島津豊後守季久供養碑

げんりゅういんがま さつまやきにしもち だけい 元立院窯（薩摩焼西餅田系）

永富 巖

帖佐中学校の近くに「元立院窯跡」の碑があります。

寛文3年（1663）、小野元立が中心となり出資し、元肥前陶工の北村傳右衛門を招いて窯を築いた場所です。後に龍門司焼を始める山元碗右衛門も加わっていました。当初、磁器を製造し

たものの収支が合わず、他の出資者撤退後は、陶器製造に切り替えたともいわれています。

その後、寛文5年（1665）には藩主島津光久に陶器12種を献上しています。

寛文10年（1670）、小松窯を分窯し、延宝8年（1680）には、藩の焼物奉行から他国への販売を申し渡されるほど製陶が盛んになり、最盛期には数十戸が従事していたようです。

さまざまな日用雑器が焼かれ、なかでも厚い釉薬を二重に掛けた白蛇蝸釉・黒蛇蝸釉などが有名です。どんこ釉と呼ばれる数層に釉薬を厚くかける独特のものも焼かれ、龍門司窯、長太郎窯、都城の小松原窯に引き継がれています。

延享3年（1746）ごろ廃窯となり、5代目元立は、龍門司窯に移ったといわれています。



黒釉花生

黒蛇蝸釉茶碗

蛇蝸釉茶碗

黒釉雲気文茶碗

白釉大鯰肌茶碗

元立院窯跡製品〔歴史民俗資料館蔵〕

「暮らしの手帖」展

吉田 茂子

「暮らしの手帖」は、昭和23年に創刊された家庭向け生活雑誌です。

終戦を迎え生きていくのがやつの時代、女性たちはつらい状況を必死になって耐え、生き抜いてきました。そんな女性の役に立つような「女を幸せにする雑誌をつくりたい」という一念で、編集者の花森安治氏と大橋鎮子氏によって創刊されたのが「暮らしの手帖」でした。

ファッションや料理、各種の商品テストなど、すべてが手間暇をかけた手作りの雑誌です。表

紙絵もすべて花森氏の手によるものでした。

この展示のきっかけは、創刊号を含む「暮しの手帖」が歴史民俗資料館に寄贈されていたことと、花森氏と大橋氏をモデルにしたNHK連続テレビ小説「とと姉ちゃん」が放映されていたことでした。

各年齢層の来館者からたくさんの感想文が寄せられ、大盛況のうちに展示会は終了しました。



あたごやま しょうぐんじぞう 愛宕山の将軍地蔵

橘木 雅晴

漆の愛宕山山頂の県指定文化財「漆の庚申塔」に隣接して、愛宕山と彫られた石祠があります。明暦2年（1656）造立の石祠の前に一部破損した将軍地蔵の石像が無造作に置かれています。

将軍地蔵は鎌倉時代以降、武家の間で軍神として信仰され、甲冑を着け軍馬に跨った勇壮な姿をしています。一説には白馬の勇士は平家物語に登場する「斎藤実盛」の出陣する姿であるとの伝承があります。



将軍地蔵

忠誠と武勇そして人情深い実盛は木曾義仲軍との戦いで、田の稲株につまずいて敵に討たれ最期を迎えました。その恨みにより、実盛は稲の害虫になったという伝説があり、以後実盛の霊を供養して害虫を除くため、大勢で松明を灯し鉦や太鼓を打ち鳴らし、害虫を退散させる虫送りの行事（実盛送り）が各地に残っています。

ひきやま 日木山の義久公別荘

坂元 清美

慶長12年（1607）、島津義弘は加治木に居城を移します。その時兄の義久は富隈におり、距離も近いので互いに行き来していました。

「加治木案内記」によると、義弘はことさら眺めの良い日木山に別荘を設け、義久に献じました。義弘は、義久が自由にここに来て休息することを無上の喜びと考えていたようです。義久が微行してここへ来た時は、義弘もすぐにやって来て歓談したと伝えられています。

義久逝去の後には義弘の別荘となり、のち加治木島津家が所有し代々引き継がれました。

その後この地には吉野桜数百本と梅花芳樹が植えられ、公園となりました。これが扇和園のいわれといえます。

大正7年（1918）の義弘公逝去三百年祭の時に精矛神社がこの地に遷座され、今日に至っています。

*微行=身分の高い人がお忍びで出歩くこと



精矛神社

田の神さあの持ち物

吉田 茂子

甕こしきの敷き物をあみだ笠くくのようにかぶり、タスキをかけて括りぼかま袴はかまをはいた田植え仕事姿で、手にはメシゲわん・碗わん・スリコギなどを持ち、おどけた顔で田の神舞いを踊らっしゃる。

烏帽子えぼしをかぶり、束帯姿そくたいすがたで笏しやくを持ち、良かよに二才にせ顔の神像姿で、雨が降ろうが檜やりが降ろうが、すまし顔でござらっしゃる。

このように像によって持ち物がちがいます。

修行中の僧侶ずだぶくろが頭陀袋くわを下くだげ、鍬くわなどを持ち杖つえを片手の旅姿たびざも見ることがあります。

18世紀頃から立つ田の神さあ、その姿は痛々しいほどに風化して持ち物も見分けがつかなくなってきたのが現状です。



始良市平松ふれだの稲留神社境内いなづまに立つ神主姿かみなりの像は、しぐさや表現が豊かで、手に碗わんとメシゲわんをしっかりと持ち、稔みのりを待っているかのようです。
*稔みのり=実みのり

蒲生ふるさと交流館

橘木 國丸

この交流館は、平成23年に旧蒲生保育所を改造し、地域の交流拠点の場としてオープンしました。館内は交流室・資料室・廊下ギャラリー・展示室に分かれ、展示室は蒲生出身の彫刻家・板橋一步いたばし いっぽの作品を常設展示しています。一步の没後10年を機に平成20年作品の里帰りが実現し

ました。

一步(政義)は明治44年(1911)蒲生に生まれ、薩南工業建築科、東京高等工芸学校(現在、千葉大学)を卒業後、富山で教壇に立ち、板橋ゆきと結婚し婿養



蒲生ふるさと交流館

子となりました。終戦後「一步」を名乗り彫刻に集中、日展入選11回、ロンドン展入賞、二紀会最高同人賞を獲得しました。

一方、富山県彫刻家連盟委員会委員長などの要職も歴任、後継者養成に尽くし、文化功労者として勲5等瑞宝章ずいほうしょうや紺綬褒章こんじゆほうしょうを受章しました。平成5年(1993)富山県せいきよで逝去、82歳でした。



編集後記

平成28年度に始良歴史ボランティア協会が実施した主な活動をご紹介します。

①歴史館主催イベント行事でのガイド

- 5月「掛橋坂及び蒲生北・米丸地区めぐり」
- 11月「建昌城周辺史跡めぐり」

②自主研修活動

- 6月湧水町史跡研修(現地ガイド案内)
- 9月祁答院町史跡研修(会員のガイド実践)

③一般客の要請によるガイド など

なお、本年2月25日には初めての試みとして公募によるガイド「島津義弘ゆかりの豊州島津家墓地周辺史跡めぐり」を実施しました。

平成29年度も皆様方からのガイド要請を心からお待ちしております。

ご連絡は歴史民俗資料館へ 0995(65)1553